

## ■ 「校正」とは

■  
■  
■

検

なお、校正とよく似た概念として「校閲」という作業があります。校閲がカバーするのは、文章内の事実関係の誤りや論理構成の矛盾、法令違反や差別などの不適切な表現を<sup>検</sup>出してたずこと。2つの違いを端的に言えば、校正が見るのは表記や体裁、校閲が見るのは内容だということになります。

■  
■  
■

## ■ 校正者の言語「校正記号」

■  
■  
■

校正記号は出版や印刷関連の業界における共通言語であり、仕事の節々で用いられています。業界の人間であれば使いこなすのは造作もないこと！と言いたい<sup>植</sup>ところなのですが、ごくまれにすれ違いが起きることがあるようで……作品内にはこんなエピソードがありました。

植

■  
■  
■

なお、引用部のあたまに出てくる呉智英氏は日本の評論家で、この作品の中でも何度か引き合いに出されています。呉氏は新聞などで<sup>植</sup>誤植や言葉の誤用を見つけてそれを手紙で指摘する、というのが長年の趣味だとのこと。「すべからく」の誤用を指摘したことで有名です。暗阪からすると、校正者として何かシンパシーを感じていたのかもしれませんが。

■  
■  
■

## ■ 想定外の赤字

移

■  
■  
■

さて、ら抜き言葉「を」直すのではなく、ら抜き言葉「に」直すという衝撃。暗阪の驚きが見てとれます。ただ、それと同時に日本語の<sup>映</sup>映り変わりについてある種達観しており、ら抜きをあげつらう自分の頑迷さを客観的に見ているような様子でもあります。言い換えれば、こうしたアップデートに翻弄されるのも校正者の宿命なのかもしれません。

並字になおす

なお、このエピソードが書かれたのは1991年。では、2022年現在「ら抜き言葉」は正式な日本語となったかという、そうでもない……というのが<sup>映</sup>一般的な見方ではないでしょうか。話し言葉であれば使われていても、ビジネスなどのあらたまった場面では避けるのがマナー、とされているのをよく見かけます。もし暗阪に今の状況について訊いてみれば、また違った所感を述べるのかもしれませんが。